

機関番号: 64401

研究種目: 基盤研究(B)

研究期間: 2008~2010

課題番号: 20401021

研究課題名(和文)多言語社会における移民言語状況と移民言語政策の国際比較

研究課題名(英文)A Comparative Study of Immigrant Language Situations and Immigrant Language Policies from an International Perspective

研究代表者

庄司博史(SHOJI HIROSHI)

国立民族学博物館・民族社会研究部・教授

研究者番号: 80142016

研究成果の概要(和文):

1980年代後半からの日本の急激な多民族化の進展のなか、移民とともにいくつかの移民言語が生活言語として定着しつつある。同時に日本語を母語としない移民にとって、生活、教育の面でさまざまな言語問題も生じている。本研究は、いままで日本ではあまり注目されることのない移民言語に焦点をあて、社会言語学的立場から、その実態、および移民にかかわる言語問題への政策に関し調査研究をおこなった。その結果、国家の移民政策、移民の地位、ホスト社会の態度とのかかわりなど、移民言語を取りまく状況は大きくことなるが、今後日本が欧米のような多民族化に向かう上で、移民、国家双方の利益にとっていくつかの示唆的な事例もみられた。

研究成果の概要(英文):

Along the rapid increase of foreign population from the late 1980's several immigrant languages have emerged in Japan as settled living languages. At the same time these non-Japanese speakers have encountered various communicative problems in their daily life and in education to their children. This project has paid attention to immigrant languages and studied from a sociolinguistic viewpoint about their present situations as well as policies towards immigrants' language problems. Immigrant language situations vary greatly in accordance with state's immigrant policies, immigrants' status and the attitude of the host society to immigrants. In the course of study, several notable cases, however, have been observed in respect to the possibility to accommodate both immigrants' and the state's interests, for Japan's probable transition to a multiethnic society as has been seen in Western immigrant states.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2009年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2010年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
年度			
年度			
総計	12,400,000	3,720,000	16,120,000

研究分野：人文学B

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：移民、移民言語、移民政策、言語政策、母語教育

### 1. 研究開始当初の背景

日本においても、1980年代後半以降、外国人の急増により現在は220万人以上、人口の1.7%あまりが外国人登録者によってしめられ、明らかに多民族化時代に移行しつつあるといえる。

特に近年急増したコリアン、ブラジル人、中国出身者によりもたらされた言語（移民言語）が現実には日本社会で、コミュニティ言語として様々な場面で運用され、機能しはじめており、一般の日本人も実際耳にし、街頭表示などでこれらと接触することは日常化している。西欧やオーストラリアなどいわゆる移民先進国では、すでに1980年代から、移民やその言語への関心が強まり、移民言語の使用、維持、教育、主流派言語への同化などが調査研究されている。これらの研究は平行しておこなわれてきた行政による移民言語教育やコミュニティ活動支援、通訳翻訳支援等のための、指針作り、モニタリングなどにいかされている。

日本においても、旧来のコリアン、中国人オールドカマーにくわえ、外国人ニューカマーがかかえる言語問題や子供たちの言語教育、文化適応などの問題に関して、ようやくさまざまな取り組みがみられるようになった。特に自治体行政の多言語サービス、ボランティアによる外国人への多言語支援は近年、西欧にもならぶレベルにまで達する地域もある。さらに、子供への母語教育においては、すでに国家による言語政策面での制限を越える形で自治体やNGOなどにおいて進行中である。現在の日本における移民言語の受容への動きは、かつてオールドカマーの言語がその存在さえ認識されなかった時代と比べても特記される。

しかし、移民の言語が日本社会の中でいかに運用され、維持されているか、またその存在がいかに日本人によって認識され、顕在化しているかについての総合的な研究は進んでいない。1980年代にようやく始まった在日コリアンオールドカマーの社会言語学的研究をのぞき、他の移民言語コミュニティに関しては、使用の実態調査すらも十分におこなわれていない。

### 2. 研究の目的

本研究では、進行しつつある社会、特に都市の多民族化のなかで、移民言語のあり方、存続、使用をいかにコンフリクトの少ない形で編成しうるか、いかに移民を日本社会に言語的に統合しうるか、に大きな関心を持って

いる。しかし、都市の多民族化が、言語の面でいかに可視化するか、また、問題化するかは、国家や社会によって一様ではない。たとえば、移民言語が可視化する際、それが多数派、あるいは他の移民コミュニティとの間で常に摩擦をおこすわけではない。他方で、コミュニティにおける活発な言語使用が存在するにもかかわらず、それがほとんど可視化しないケースもある。本研究の特徴として、このような都市の移民言語による多言語性の維持と顕在化の状況、およびそのメカニズムを、国際比較、コミュニティ比較により明らかにすることが挙げられる。

移民言語の社会的存在へ接近するための具体的視点として、都市における多言語表示、エスニックビジネス、エスニックメディア、行政の多言語サービスがあるが、住民の外国語受容意識、外国人の自言語への意識、さらに国家や自治体の言語政策、そして、経済的な観点からの言語の資源化、産業化への事例から考察できる。

本研究では、具体的な調査対象として以下のことを目標としている。

- ・諸都市における移民の言語使用、維持の実態に関する基礎的データの収集。

- ・多民族化が、いかなる可視的/非可視的な多言語化現象をともなうかについて、移民言語政策、言語サービス、および言語的経済・文化活動など具体的なデータの収集、移民および多数派住民の言語意識の実態。

- ・移民言語の維持存続に大きくかかわる移民の子どもへの言語教育の理念と実態の調査。

### 3. 研究の方法

本研究は日本の多民族化において、外国人、特に移民との言語的共存の道を探ろうとするものである。ここでは、具体的にさまざまな形で進行する移民言語をとりまく状況に焦点をあて、海外都市における移民言語の現状や国家や地域行政の言語政策、住民の言語意識、そして言語教育に関し国際比較によりその方法を模索したい。調査では各地の人口移動や移民政策に関する研究を参考にしながら、社会言語学の観点から、実際に各地の移民コミュニティの言語活動の状況や移民言語にかかわる政策について、インタビュー、アンケートや観察により収集されたオリジナルな資料を重視し考察する。

### 4. 研究成果

第一の目的であった、各地、各国におけ

る移民言語の使用、維持など一般的状況、それを取りまく社会環境などについて、フィンランド、スウェーデン、ドイツ、韓国、カナダ、アメリカ、イギリス、スペイン、日本などから新たな知見が得られた。例えば、スウェーデンでは、熱心な母語教育、言語支援にもかかわらずフィンランド語は移民一、二世のみに維持され、三、四世においてはほとんど失われている。一方、アメリカ、イギリスでは、言語支援のほとんど存在しないポルトガル語がブラジル人の間では維持されており、これは盛んなエスニックメディア活動に表れている。言語使用、維持に関してコミュニティ自体の言語意識が言語政策に勝る例として注目できる。日本在住のドミカ移民の場合、多くの場面で他のスペイン語圏出身者と活動を共にする一方、固有の発音や語彙をコミュニティのシンボルとして意識していることが明らかになった。

第二の目的である国家、地域行政における移民への言語政策理念、言語サービス、および移民言語の経済的・文化的価値と使用に関して、ドイツ、フィンランド、スウェーデン、アメリカ、韓国、カナダなどから興味深い事例が得られた。例として、近年になって急速な多民族化の始まった韓国の場合、移民に対して、政府、地域行政、市民団体などから多方面支援が政策理念に先行する形で行われている。特に農村部の場合、外国人移住女性による国籍や文化の異なるコミュニティに対し言語事情を配慮した支援、韓国語教育がおこなわれている。またカナダでは中国系コミュニティなど有力な社会基盤を築いた移民コミュニティが仲介となり、他のコミュニティに対し国家の多言語多文化政策の一旦を担う例も見られた。

第三の言語教育に関しては、フィンランド、スウェーデン、韓国、アメリカ、カナダ、シンガポール、ドイツにおいて移民に対する母語教育および主要言語教育にかかわる調査がおこなわれた。フィンランドでは3年にわたり2都市における9言語の母語教育の調査を実施した。ドイツにおいては移民の子どもに対する言語意識調査に重点がおかれたほか、政府が重視している就学前言語教育に関し多角的調査を実施した。

以上、各国の移民言語の実態および移民言語政策を日本と比較した際、後者の特徴および課題として以下の点が指摘できる。

1) 欧米などいわゆる移民先進国に比べ、日本の一部の移民エスニックコミュニティの日本語への同化の速度は速い。一方で移民エスニックコミュニティの社会統合はあまり進んでおらず移民言語を基盤とした経済、文化活動は一般的によわい。これらは日本では全体として移民コミュニティの存在を認め擁護する明確な政策理念の不在に起因す

る可能性もある。

2) 日本の行政の移民に対するいわゆる多言語サービスは、全体としてみた場合、公的空間の多言語表示や活字媒体による多数を対象とする情報提供、広報では比較的進んでいるといえる。しかし北欧などではこのような分野の多言語使用は限定的である一方で、多言語サービスはむしろ通訳（有償・無償）を用いる個人対応の方向に進んでおり、通訳エージェントを育てながら行政との分業がおこなわれている。

3) 移民言語の社会的な活用は、スウェーデン、フィンランドに見られるように、移民の老人介護における移民言語使用、通訳エージェントにおける移民言語使用者の雇用などに見られるように行政が率先して行っている例もある。また行政窓口への移民の登用も、移民言語の資産価値を高めるものである。かつて言語的に日本語に同化した第二世代でさえ就職が困難であった日本でも、今後は移民を積極的に公的部門、さらには移民政策立案に参加させることは、双方にとって今後重要性がますます高まると思われる。

4) 日本では移民の子どもへの母語教育は公的教育が担うという意識は定着していないため、行政がそれを実施することは未だ例外的である。それに対し移民への日本語教育はさかんに行われている。これは母語教育と日本語（第二言語）教育が双方の関連付けを欠いたまま進行する要因となっている。それに対し例えばフィンランドでは双方を一体のものとしてとらえ相互に調整することで教育効果をあげている点が注目される。

5) 移民の積極的社会統合へ向かう西欧では、一部で多文化主義を採用しつつもドイツに見られるように国家の主要言語ドイツ語の学習・習得を移民受け入れの条件とし、特に労働者への主要言語の教育には積極である。このようなプログラムからは高齢者、家庭女性、非識字者は脱落しがちであったが近年では、民間でかれらの社会参加を促すための識字、主要言語教育もみられる。日本では成人移民の日本語教育さえ、公的機関の分担は極めて限定されている現状で、高齢者、家庭女性、非識字者への日本語教育はこれからの課題であろう。

6) 今日、日本において移民言語に対する拒否観はあまり顕著ではない。これは公的空間における移民言語表示、あるいは移民への言語サービス事業の拒否や排除として表れていないことにも見られる。しかしこれらが多文化主義に根差すものか、移民言語との接触経験の短さによるかは断言できない。言語対立あるいは拒否の動きが先鋭化する以前に十分な言語的共存にむけての啓蒙・教育が必要であろう。

以上、成果の概略を述べたが、今後プロジ

ェクト参加研究者の個別および総括研究において詳細を明らかにする予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 33 件)

- 1) 渡戸一郎 2011 「横浜市鶴見区における協働実践研究の課題と実践—複合民族化する大都市インナーエリアからの報告—」『地域における越境的な「つながり」の創出に向けて—横浜市鶴見区にみる多文化共生の現状と課題—』No. 12 (シリーズ多言語・多文化協働実践研究 12)、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター4-10 頁(査読なし)
- 2) 庄司博史 2010 「資産としての母語教育の展開と可能性—その理念とのかかわりにおいて」『ことばと社会 移民と言語②』三元社 12 号 7-48 頁(査読あり)
- 3) 庄司博史 2010 「多言語政策の理念と施策—日本と北欧を中心として」『月刊日本語学』(特集言語接触の世界)29 巻 14 号 220-234 頁(査読なし)
- 4) 庄司博史 2010 「外国語から移民言語へ」『民博通信』131 号 14-15 頁(査読なし)
- 5) Shoji, Hiroshi 2010 “What can immigrants bring with them? A sociolinguistic perspective”, *MINPAKU Anthropology Newsletter*, No 31, 3-5 (査読なし)
- 6) 平高史也 2010 「ブラジル人の日本語コミュニケーション」『日本語学』(特集言語接触の世界) 29 巻 14 号 108-117 頁(査読なし)
- 7) イシ、アンジェロ 2010 「在住外国人への広報 ~在日ブラジル人の事例を中心に」『国際文化研修』69 巻 22-29 頁(査読なし)
- 8) オストハイダ、テーヤ 2010 「フィールドワークのすすめ—対『外国人』コミュニケーション行動を例に—」『日本語学』29 巻 12 号 46-56 頁(査読なし)
- 9) オストハイダ、テーヤ 2010 「日本の多言語社会と言語教育政策—『外国語』から『複言語』教育へ—」*Revue Japonaise de Didactique du Français*, 5(1) 373-378 頁(査読なし)
- 10) 金美善 2010 「在日コリアンの言語をフィールドワークする」『日本語学』(特集フィールド言語学の第一歩) 明治書院 29 巻 12 号 32-44 頁(査読なし)
- 11) 藤井久美子 2010 「21 世紀の長崎華僑華人をめぐる新たな動き—時中小学校の変遷を中心とする—考察—」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』22 号 1 - 7 頁(査読なし)
- 12) Backhaus, Peter 2010 “Multilingualism in Japanese Public Space: Reading the Signs”, *Japanese Studies*, 30 (3) 359-372

(査読なし)

- 13) 庄司博史 2009 「関西の多言語表示—多言語化とのかかわりを中心に」『日本語学』28 巻 6 号 24-33 頁(査読なし)
- 14) 庄司博史 2009 「プロジェクト—日本の移民言語と多言語化」(2009. 12. 28) 『民博通信』127 号 18-19 頁(査読なし)
- 15) 稲葉佳子・石井由香・渡戸一郎ほか 2009 「公営住宅における外国人居住に関する研究—外国人を受け入れたホスト社会側の対応と取り組みを中心に—」『住宅総合研究財団研究論文集』3 5 巻 275-286 頁(査読なし)
- 16) 渡戸一郎 2009 「2 年間の協働実践研究から見えてきたもの」東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター編『越境する市民活動と自治体の多文化共生政策—外国につながる子どもの支援活動から—』(シリーズ多言語・多文化協働実践研究 8 巻) 40-44 頁(査読なし)
- 17) 井上史雄 2009 「経済財としての言語」『応用言語学研究』11 号 95-102 頁
- 18) 井上史雄 2009 「グーグル・ストリートビューの言語景観」『日本語学』28 巻 6 号 43 頁(査読なし)
- 19) 金美善 2009 「新宿の移民言語—韓国系移民の経済活動を中心に」『日本語学』(特集多言語社会・ニッポン) 28 巻 6 号 136-148 頁
- 29) 藤井久美子 2009 「九州南部での多言語表示」『日本語学』(特集多言語社会・ニッポン) 28 巻 6 号 45-57 頁
- 30) 庄司博史・井上史雄・金美善・バックハウス、ペート・ロング、ダニエル 2008 「日本社会の多言語化と言語景観のとらえかた」『社会言語科学』11 巻 1 号 170-174 頁(査読なし)
- 31) イシ、アンジェロ 2008 “Uma escola pública, gratuita, bilingüe. Sim, isso já existe no sul da Flórida, *Alternativa* (Nippaku Yuai 発行) 2008. 10. 09 号 22 頁(査読なし)
- 32) 金美善 2008 「다언어 경관으로 본 재일 코리언의 언어생활」(多言語景観からみた在日コリアンの言語生活)(執筆言語:韓国語)『国際高麗学』国際高麗学会 1 1 巻 49-62 頁(査読あり)
- 33) 金美善 2008 「移民女性と識字問題について—夜間学校に学ぶ在日コリアン—世の識字戦略」『ことばと社会』編集委員会編『ことばと社会 移民と言語①』三元社 11 号 69 頁-92 頁(査読あり)

[学会発表] (計 24 件)

- 1) 平高史也 「ドイツにおける移民言語政策の変遷と現状」神奈川大学学内共同研究「グローバルズムに伴う社会変容と言語政策に関する包括的研究」(2011. 3. 4 神奈川大学横浜キャンパス)

2) 金美善「在日朝鮮人の朝鮮語」立命館大学コリア研究センター第10回国際シンポジウム「言葉のなかの日韓関係」(2011.1.22 立命館大学・京都府)

3) 庄司博史「多言語社会とことばの共生」(招待講演)総合研究大学院大学文化科学研究科 学術研究フォーラム 2010 シンポジウム「共生」(2010.11.7 東京駅八重洲ビジネスセンター・東京都)

4) 庄司博史「日本の多言語化と移民言語—複言語主義とのかかわりを視点に置いて」(招待講演) Colloque International 2010: Mondialisation universitaire et Plurilinguisme (2010.11.5 京都大学・京都府)

5) 庄司博史「もう一つの移民言語政策—移民にとっての母語教育」(招待講演)日本語教育学会(西日本研究会)(2010.9.12 京都外国語大学・京都府)

6) 渡戸一郎「経済危機後の外国人移民政策の課題—多文化共生政策の曲がり角?」研究フォーラム『日本の移民言語と移民言語研究の展望と課題』(共同研究成果発表)(2010.6.12 国立民族学博物館・大阪府)

7) 平高史也「ドイツの統合コースとCEFRのその後」日本語教育学会テーマ研究会「多文化共生社会における日本語教育研究会」(2010年度夏季研究会)(2010.8.28 (財)海外技術者研修協会(AOTS) 東京研修センター・東京都)

8) 井上史雄「言語資源としての移民言語」研究フォーラム『日本の移民言語と移民言語研究の展望と課題』(共同研究成果発表)(2010.6.12 国立民族学博物館・大阪府)

9) イシ、アンジェロ “Family issues of Brazilian migrants in Japan” IOM (国際移住機関) 主催, IDM Workshop “Migration and transnationalism: opportunities and challenges” (2010.3.9-10 International Conference Center, Geneva)

10) オストハイダ、テーヤ「日本の多言語社会とコミュニケーション—意識・政策・実態」研究フォーラム『日本の移民言語と移民言語研究の展望と課題』(共同研究成果発表)(2010.6.12 国立民族学博物館・大阪府)

11) 金美善「재일동포의 언어현황」(在日同胞の言語現状) 韓国国立国語院国際学術会議「南北言語の統合と在日同胞の言語」(2010.10.30 大阪国際交流センター・大阪府)

12) 金美善「在日コリアン1世女性の識字問題—日本語識字社会に、非識字移民女性として生きること—」第一回コリアンコミュニティ研究会研究大会(2010.6.3 大阪市立大学・大阪府)

13) バックハウス、ペート「言語景観から読み解く日本の多言語化」シンポジウム『世界の言語景観 日本の言語景観』(2010.1.24 富

山大学・富山県)

14) 窪田暁「スペイン語系移民言語の多様性—ドミニカ系コミュニティにおける言語使用—」研究フォーラム『日本の移民言語と移民言語研究の展望と課題』(共同研究成果発表)(2010.6.12 国立民族学博物館・大阪府)

15) 庄司博史「日本の多言語化と点字」国際シンポジウム「点字力の可能性—21世紀の新たなルイ・ブライユ像を求めて」(2009.11.23 国立民族学博物館・大阪府)

16) イシ、アンジェロ「グローバル時代の移民研究—在日ブラジル人のメディアを中心に—」国際学術シンポジウム「グローバル時代の外国研究と自国研究」(2009.3.9 韓国・高麗大学)

17) オストハイダ、テーヤ「日本の多言語社会と言語教育政策—『外国語』から『複言語』教育へ—」シンポジウム「複言語主義・複文化主義とグローバル化と多極化」京都大学国際研究集会『外国語教育の文脈化：ヨーロッパ言語共通参照枠+複言語主義・複文化主義+ICT とポートフォリオを用いた自律学習』(2009.4.3-4 京都大学・京都府)

18) 金美善「移民女性と識字問題について—夜間学校に学ぶ在日コリアン—世の識字戦略—」(招待講演)現代日本語研究会、第3回「ことばとジェンダー」賞 受賞講演会(2009.8.3 国立女性教育会館(ヌエック)・埼玉県)

19) 金美善「移民女性と言語問題」多言語化現象研究会 10周年記念研究大会・研究フォーラム「多言語化する日本社会—理想と現実」パネル発表(2009.6.20 国立民族学博物館・大阪府)

20) バックハウス、ペート「言語景観と日本の多言語化：東京を事例に」日本言語政策学会(2009.5.30 早稲田大学・東京都)

21) 窪田暁「ドミニカ系コミュニティにおける言語使用について」国立民族学博物館共同研究会『日本における移民言語の基礎的研究』(2009.12.20 国立民族学博物館・大阪府)

22) Ostheider, Teja “Communication with Foreigners” in Japan: Image and Reality.” International Conference on Plurilingualism, Multiculturalism and Language Learning: Comparing Japan and Italy (2008.10.6-8 Tusca University, Italy)

23) 藤井久美子「バンクーバー・オールドチャイナタウンでの言語生活—広東語・北京語・英語の使用割合—」日本華僑華人学会 2008年度大会(2008.11.15 筑波大学・茨城県)

24) 藤井久美子「カナダ・バンクーバーにおける中国系コミュニティの言語使用に関する—考察—アンケート調査と文献資料の分

析からー」大阪大学言語文化学会第 33 回大会 (2008. 6. 28 大阪大学・大阪府)

〔図書〕(計 14 件)

- 1) 平高史也 2011 『第 2 言語』から見たドイツと日本の言語意識－移民に対する言語教育を中心に」山下仁・渡辺学・高田博行編『言語意識と社会－ドイツの視点・日本の視点』三元社 113-136 頁
- 2) バックハウス、ペート 2011 「言語景観から読み解く日本の多言語化：東京を事例に」中井精一、ダニエル・ロング (編) 『世界の言語景観・日本の言語景観』桂書房 122-128 頁
- 3) Backhaus, Peter 2011 “Modernity re-written: Linguistic landscaping in Tokyo”, P. Heinrich & C. Galan (eds.) *Language Life in Japan*. London and New York: Routledge pp.154-169
- 4) 庄司博史 2010 「日本の多言語化と点字－公共空間の点字からよむ社会のうごき」広瀬浩二郎編『万人のための点字力入門－さわる文字から、さわる文化へ』生活書院 163-173 頁
- 5) 渡戸一郎 2010 「外国人集住地域における「ローカルな公共性の再構築」が意味するもの－日系ブラジル人の集住団地の事例から－」藤田弘夫編『東アジアにおける公共性の変容』慶応義塾大学出版会 363-380 頁
- 6) イシ、アンジェロ 2010 「在日ブラジル人による表現活動の戦略と意義－音楽家の事例を中心に」中川文雄他編著『ラテンアメリカン・ディアスポラ』明石書店 226-248 頁
- 7) イシ、アンジェロ 2010 「ブラジル系エスニック・ビジネスの展開と変容－2000 年代の動向を中心に」小内透編著『講座 トランスナショナルな移動と定住・第 1 巻 在日ブラジル人の労働と生活』御茶の水書房 109-132 頁
- 8) 庄司博史 2009 「多言語化と多言語景観－多言語景観からなにがみえるか」庄司博史、バックハウス・P、クルマス・F (編) 『日本語言語景観』三元社 17-52 頁
- 9) 井上史雄 2009 「経済言語学からみた言語景観－過去と現在」庄司博史、バックハウス・P、クルマス・F (編) 『日本語言語景観』三元社 53-78 頁
- 10) 金美善 2009 「言語景観における移民言語のあらわれかた－コリアンコミュニティの言語変容を事例に」庄司博史、バックハウス・P、クルマス・F (編) 『日本語言語景観』三元社 187-205 頁
- 11) バックハウス、ペート 2009 「日本の言語景観の行政的背景」庄司博史、バックハウス・P、クルマス・F (編) 『日本語言語景観』三元社 145-170 頁
- 12) 庄司博史 2009 「フィンランドにおける移

民の母語教育－移民統合政策の一環として－」庄司博史編『移民とともに変わる地域と国家』国立民族学博物館調査報告 (SER 83) 国立民族学博物館 279-298 頁

13) 平高史也 2009 「移住者に対するドイツの言語教育－母語教育を中心に」庄司博史編『移民とともに変わる地域と国家』国立民族学博物館調査報告 (SER 83) 国立民族学博物館 317-330 頁

14) 金美善 2009 「朝鮮総連系民族学校のバイリンガル教育－直面する課題について－」庄司博史編『移民とともに変わる地域と国家』国立民族学博物館調査報告 (SER 83) 国立民族学博物館 299-315 頁

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

庄司博史 (SHOJI HIROSHI)

国立民族学博物館・民族社会研究部・教授  
研究者番号：80142016

### (2) 研究分担者

渡戸一郎 (WATADO ICHIRO)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：00230946

平高史也 (HIRATAKA FUMIYA)

慶應義塾大学・総合政策学部・教授

研究者番号：60156677

(3) 連携研究者

井上史雄 (INOUE FUMIO)

明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：40011332

オストハイダ、テーヤ (OSTHEIDER TEJA)

関西学院大学・法学部・准教授

研究者番号：50411583

イシ、アンジェロ (ISHI ANGELO)

武蔵大学・社会学部・准教授

研究者番号：20386353

金美善 (KIM MISEON)

国立民族学博物館・研究員

研究者番号：50469623

藤井久美子 (FUJII KUMIKO)

宮崎大学・教育文化部・准教授

研究者番号：60304044

(4) 研究協力者

バックハウス、ペート (BACKHAUS PETER)

早稲田大学・教育学部・准教授

研究者番号：40582888

窪田暁 (KUBOTA SATOSHI)

総合研究大学院大学・博士課程・大学院生